

学生は《知っている」と想定された主体》の夢を見るか？ 『学び合い』、観光理論、そして／あるいはラカンの教育論

小田 昇平*

Do Students Dream of « Sujet supposé savoir » ?

"Learning Together", Tourism Studies, and/or Jacques Lacan on Education

ODA Shohei*

ABSTRACT

In this article, I consider the mechanism of "Learning Together", invented by Mr. Jun Nishikawa, Professor of Joetsu University of Education, through two theories : the tourism studies, here I consult *The Tourist Gaze 3.0* (2011) by John Urry (1946-2016) and Jonas Larsen, and the psychoanalytic theory, especially by Jacques Lacan (1901-81). In a class, when "Learning Together" is applied, how and why our students do study each other? « Sujet supposé savoir » is established in their teacher, then in their classmates, i.e. « transfert » is established. I demonstrate and interpret the mechanism of "Learning Together" as a system of « Sujet supposé savoir » and « transfert » which give the students pleasure of teaching, so that "Learning Together" is infectious. Thanks to its infectious nature, the first student who breaks ones usual group will go beyond the boundaries, and will convey new ideas and correct answers as »Fremde« described by Georg Simmel (1858-1918).

Key Words : "Learning Together", Tourism Studies, Jacques Lacan, Georg Simmel

On ne voit bien qu'avec le cœur.

L'essentiel est invisible pour les yeux.

Antoine de Saint-Exupéry

Le Petit Prince

1. はじめに

本論文は、上越教育大学教職大学院の西川純教授が新しい時代の教育として提唱する、『学び合い』[1]におけるメカニズムを考察するものである。『学び合い』において生じる《知っている」と想定された主体 *Sujet supposé savoir*》の成立、ひいては「転移 *transfert*」の成立を、ジョン・アーリ (John Urry, 1946-2016) / ヨーナス・ラーセン (Jonas Larsen) の観光理論と、ジャック・ラカン (Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-81) の思想とからみてとり、『学び合い』のメカニズムに解釈を与えるとともに、ラカンの教育についての考え方と教育実践とを確認する。以上が本論文の目的である。

2. 二重括弧の『学び合い』

この二重括弧に括られた『学び合い』は、「ひとりも見捨てないこと」を目標として、学ぶものの幸福を願って考案された「考え方」である。この『学び合い』は、あくまでも「考え方」であって、「技法」ではないことが強調されている。技法ではないことを認めた上で、その場で起きていることをあえて記載するならば、教師が最初と最後に語り、それ以外は学ぶものたちが自由に学ぶ、というものである。アクティヴ・ラーニングの極北とも言うことができる。しかしどうして、教師が教える、という従来のやり方を手放し、学ぶものたちがお互いに教え、教えられるのだろうか。そもそも、これで学力は向上するのだろうか

* 教養科 Division of Liberal Arts

か。西川や、その考え方『学び合い』に協調するものたちは、こう主張する、「成績は上がることはあっても、下がることはまずない」[2]と。なぜなのか。どうしてだろうか。

西川は『学び合い』のメカニズムを、膨大なデータを分析することで明らかにしており、その結果は論文や著書としてまとめられている。門外漢からは、あるいはやったことのないものからは、はたして効果があがるのだろうか、いったいなぜ、それでもクラスがひとつの方向へと動いていくのか、といった疑問が提示される。西川はこうした質問、疑問に対して、論文や著書で丁寧に解説している。それどころか、実際に取り組みを見学することをすら推奨している。学ぶものたちがいかにして、西川ら教師の意図を汲んで動いていくのか、こうした側面についても、データ分析からその妥当性を証明している。いづれにしても、百聞は一見に如かず、というわけだ。

論者の関心は、学ぶものたちはなぜ、学ぶということにコミットするのか、そしてその先に、学んだことを教えよう、と思うようになるのか、ということに帰結する。結論を先取りするならば、これは学ぶものにとっての《知っている」と想定された主体」となる、ある種の大人（この場面においては教師がそうであろう）の「欲望 *désire*」を引き受けることによるものであり、当該学生が、他の学生にとっての《知っている」と想定された主体」となることがもたらすよろこびによるものである。つまり、転移を意図的に生じさせ、欲望を喚起させるわけだ。

以下、そのメカニズムを検討する。まずはわたくしたちが、「みたいものをみている」、つまりは「知りたいものを知ろうとしている」ということを確認し、そのうえで「知っている」と想定する／される」というメカニズムへと進んでいこう。まずはジョン・アーリ／ヨナス・ラーソンの『観光のまなざし [増補改訂版] *The Tourist Gaze 3.0*』(2011)[3]を参照し、「みたいものをみる」メカニズムについて確認する。そしてそのうえでジャック・ラカンの思索へと入門しよう[4]。

3. わたくしたちは、何をみているのか

観光社会学者ジョン・アーリの手による『観光のまなざし』は、観光研究のメルクマールとなって久しい。この『観光のまなざし』は、ミシェル・フーコー(Michel Foucault, 1926-84)の『臨床医学の誕生 *Naissance de la clinique*』(1963)における「医学のまなざし *le regard médical / the medical gaze*」をもとにして編み出された、「観光のまなざし *the tourist gaze*」概念について検討するものである[5]。アーリ／ラーソンはみるという行為について、このように語る。

まなざしの概念は、みることが習得された能力であることと、そして純粹無垢な眼というものは神話に過ぎないのだということとを、強調するものである。[6]

アーリ／ラーソンによれば、わたくしたちは、みるということ何かしらのかたちで「学ぶ」。これは、日本の文化に習熟したひとがマンガを読みうることや、古代エジプト人がなぜあのような様式で壁画を描いたのかを想起すれば、理解できることであろう¹。わたくしたちはみな、こうしたモノゴトをいかにしてみるのかを、知らず知らずのうちに学んでいる。すなわち、このときの「みる」ということは、決して生得的なものではありえない。純粹無垢な眼が神話であるというのも、同様に解することができる。つまり、眼はすべてのモノゴトをみているわけではなくて、みたいものをみている、ということを示している。だからこそ、観光においてわたくしたちは、「みたいものをみるのだ。では、どのように。

「どこかへ行く」際、わたくしたちは興味関心と好奇心をもって環境をみる。こうした環境はわたくしたちが受け取るやり方で、わたくしたちに語りかける。あるいは少なくとも、環境が語りかけるであろうことを、わたくしたちは期待するのだ。[7]

かつてのキャッチコピーに、「ほしいものが、ほしいわ。」というものがあつた[8]。先の引用文とこのキャッチコピーとは、かなりの線で一致する。つまり、「なにがほしい? *Che vuoi?*」[9]の問いに対して、「ほしいものがほしい」のと同様に、「みたいものがみたい」と答えることになるだろう。たとえそれが本当は存在しなくとも。その意味において、「観光のまなざし」と精神分析とは、軌を一にする。『観光のまなざし』においては、ジグムント・フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)やジャック・ラカン、つまりは精神分析への言及はないし、参考文献リストにも記載はない[10]。にもかかわらずこの一節は、とりわけラカンの思想を彷彿とさせるに十分である。「みたいものをみる」わたくしたちの眼と同様に、わたくしたち自身は「ほしいものがほしい」し、わたくしたちが「みたいも

¹ こうした例は、わたくしによる演習に参加してくれている学生たちの協力の賜である。2019年度沼津工業高等専門学校における、5年生選択外国語、時事英語：観光学演習に参加してくれている学生たちに、ここに一人ひとりのお名前を記す余裕はないけれど、記して御礼を申し上げます。

の」を「知っている（と想定される）ひと」から何かを知りたいのだ。繰り返しになるけれど、たとえそれが本当は存在しなくとも、である。存在しない（かもしれない）ものについて語るには、精神分析において他にはない[11]。さっそくラカンの思想をひもといていこう。

4. 「先生」としての語り方

19世紀に産声をあげた精神分析は、構造主義的言語学や現象学と合流し、20世紀フランスにおいてある種の完成形をみることとなる。ジャック・ラカンによって再解釈を施された精神分析はまさにそのひとつであり、彼のセミナーが、当時のフランス知識人の耳目を惹きつけたことはよく知られている。しかしながら、ラカンの名とともによく知られている事実として、彼の著作の難解さを指摘することができよう。主著である『エクリ *Écrits*』(1966)はもちろんのこと、ラカン自身をして、「かくてこの本は読まれることとなるだろう。賭けても良い。」[12]とまで言わしめた『精神分析の四つの基本概念 *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*』(1973)においてすら、ラカンが難解であることにはかわりはない。その難解さを指摘するには、『エクリ』の一節を引くだけで事は足りるだろう。

わたくしたちの研究は、わたくしたちを、以下のことを再認するところまで連れてきてくれました。すなわち、わたくしたちが、記号的に意味する連鎖の執拗な存続 *insistance* のなかで、反復自動症 (反復強迫) *automatisme de répétition* (*Widerholungszwang*) がその原理を持っているのだということを、です。
[13] [14]

これは『エクリ』所収の筆頭に当たるもの、巻頭論文「《盗まれた手紙》」についてのセミナー *Le séminaire sur « La Lettre volée »* の、まさに最初の一文である。にもかかわらず、ラカンは「事後的に」語っていることに注意しよう。この『エクリ』という本を読むとき、冒頭から読んでいこうとする読者たちは置いてけぼりにされる。ラカンは「わたくしたちの研究は、[中略] ～まで連れてきてくれました。 *Notre recherche nous a mené à ...*」[15]と、複合過去で、終わった過去の一点のこととして、語る。わたくしたち読者を、ラカンは自分と同じ場所、同じ視点へと連れてきてくれることはない。このときラカンは、わたくしたち読者よりも圧倒的に「先」へと進んでいる。なぜラカンは、このような書き方をするのだろうか。内田樹は、ラカンがあえてこのような書き方、語り方をしているのだ、

ということを指摘している[16]。それというのも、内田曰く、「先生」となるためである。そのためにラカンは、複合過去を用いて、巻頭論文であるにもかかわらず、「終わったこととして」語りはじめるのだ。しかしながらこのこと自体は、理にかなっているとは言いがたい。その意図はいったいなんだろうか。ラカン自身が、いわば「ネタバラシ」をしている箇所を取り上げてみよう。

みなさんがまったくもって理解できないような話し方で続けるのには、完全にわざと、とまではいかなくとも、明白な意図があるのだ、とは言えましょう。この誤解の幅がみなさんに、ラカンについていけると思う、と言わせてくれる。つまり、みなさんを不確かな位置にとどまらせてくれるのです。この誤解の幅は、先へと進ませてくれる訂正への扉をつねに開いておいてくれるのです。／ことばを換えて言えば、わたくしがもし、実に簡単にわかってもらえるような話し方で、つまりはみなさんがわかったという確信をすっかり持てるような話し方に甘んじたとしたら、[中略] 誤解は取り返しのつかないものになってしまうでしょう。[17]

本当だろうか。ラカンの著作による限り、そしてそれを解釈する内田の説明を追いかける限りでは、本当だろう。わたくしたち読者は、ラカンによるこうした語り方によって、つねに遅れをとっている。ここでわたくしたちは、わからないものに対して意味を付与しようとする、ないしはそれを解釈しようとする[18]。わからないものは、わかりたい、という欲望を喚起する。ラカンは『アンコール *Encore*』(1975)において、以下のように語っている。

知、それはひとつの謎です。[19]

そのためにこそ、わたくしたちは、ラカンを、そしてラカンの読み方を知っているひとを、《知っている」と想定された主体》とみなすこととなる。《知っている」と想定された主体》とはいったいなんだろうか。ひきつづきラカンの思索をたどってみよう。

5. 《知っている」と想定された主体》とは

《知っている」と想定された主体》とはなんだろうか。ラカンが直接語っている箇所を、『精神分析の四つの基本概念』からみてみよう。

どこかに《知っている」と想定された主体》[中略]が

あるならばすなわち、転移があります。[20]

では、転移とはなんだろうか。

転移は、主体と分析家とがともに巻き込まれている現象のことです。[21]

まずは後者からみてみよう。ここでの *sujet*、つまり主体は、分析を受ける主体、すなわち患者のことを指している。分析主体／患者と分析家とは、ともに「転移」なる現象に巻き込まれる。そしてその「転移」なる現象がある、ということが出来るのは、「どこかに《知っていると思定された主体》〔中略〕がある」[22]という条件を満たすときとなる。では、どこにだろうか。この場合には、分析家に、である。ラカンは以下のように述べている。

主体にとって、誰かしら、分析家なりそうでないひとりのうちに、《《知っていると思定された主体》》のこの機能が受肉されうるときにはいつだって、さきほどわたくしが与えた定義の、つまり転移は今からすでに確立されているという定義の、結果が生じているのです。[23]

分析主体／患者は誰かしらに、《《知っていると思定された主体》》の機能を受肉する／させる。そのときにはつねにすでに、転移は確立している。転移が生じること、これが《《知っていると思定された主体》》を導くための条件となる。分析家は、それを促す側となるだろう。

分析家は、すでにお伝えしたとおり、転移の対象となるような位置をとります。[24]

したがって分析家は前もって、分析主体／患者の転移の対象となっておく必要がある。これは、『エクリ』においてすでに見受けられる、ラカンの語り方そのもの、である。『エクリ』冒頭論文である「《盗まれた手紙》」についてのセミナーにおいて、いきなり複合過去を用いてラカンが読者を「置いてけぼり」にしたのと同様に、分析家は前もって転移の対象となっておくことによって、分析主体／患者を、「置いてけぼり」にするのだ。そのために分析主体／患者は、分析家のうちに《《知っていると思定された主体》》をみる。ラカンはこうした事情を説明するために、こんなたとえ話をする。メニューの読めない中華料理屋、メニューをフランス語に訳してもらってもなお、何が出てくるのか想像もつかない、そんな中華料理屋において、お客

が女将になげかけるであろう、こんなせりふ。

このなかでわたくしが欲望しているものはなんでしょう。あなたこそが、それを知っているのです。[25]

このときお客は、女将に《《知っていると思定された主体》》をみている。すなわち、女将は前もってお客の転移の対象となっており、お客よりも先じた位置に立っている。

「《《知っていると思定された主体》》こそが転移を動機づけ」[26]るというわけだ。こうした事情をより抽象化するならば、ラカンの思想を体現する以下のフレーズとなることだろう。

人間の欲望、それは〈他者 *Autre*〉の／からの欲望なので。[27]

自らの欲望だと信じてやまないその欲望は実は、〈他者〉の／からの欲望である、という。だからこそ、「なにがほしい？ *Che vuoi?*」と問われて、わたくしたちは、「ほしいものが、ほしいわ。」とこたえる[28]のであった。同様に、観光においてわたくしたちは、「みたいもの」をみる。観光学において、この際に問題となるのは、「真正性 *authenticity*」であり、「権威づけ」である[29]が、そのみたいもの／ほしいものは、いったい誰が／何が教えてくれるのだろうか。その権威をもたらすもの、それは〈他者〉である。

6. 欲望を引き受けた先には

『学び合い』の現場においても、その〈他者〉というのは、「なにがほしい？ *Che vuoi?*」の問いに回答を投げかけるもの、のことであろう。〈大文字の他者〉である言語であり（そしてその言語をくれたのは、まわりの大人たちであったことを思い返そう[30]）、知ってほしいと欲望しているもの、つまりは教師である。学生たちにとっては、教師は分析家の立場をとる。すなわち、「転移の対象となるような位置」をとる。教師のうちに学生たちは、《《知っていると思定された主体》》を受肉する／させる。そうして教師の欲望、知ってほしい、学んでほしい、という欲望を学生たちは引き受け、自分の欲望であると勘違いし、その欲望に則って行動する。そしてその欲望を引き受けた学生の欲望を、別の学生が引き受ける。ラカンの読解を通してわたくしたちは、『学び合い』のメカニズムをここに見出すことができるだろう。

しかしながら、大きな問題がひとつ、提示できるはずだ。教えるものが学生同士でいいのだろうか。その教えるもの

は教えるに足るのだろうか。つまりは、教えるものの真正性、権威づけはどうかになっているのだろうか。アーリ／ラーソンが『観光のまなざし』においてフーコーの「医学のまなざし」を参照したのは、誠に慧眼であった。なぜならば医師とは通常、国家や法制度という権威づけをもつ、真正なものであるからだ。この「まなざし」への認可、つまりは権威づけと、観光におけるそれとを比較するわけだから、医学というまじめな、シリアスな場面と、観光といういわば不まじめな場面とが好対照をなす[31]。おそらくはまじめな、シリアスな場面とされるだろう教育現場においてはどうか。日本国における、大学や専門学校などを除くいわゆる一条校においては通常、教員免許が要求される。教員免許取得に関する所定の単位など、なんらかの条件をクリアした人物をしてはじめて、教員という職業への道が開かれる。こうした条件に鑑みるに、この『学び合い』のシステム、学生同士が教え合うというのは、はたして成立するのだろうか。なぜというに、学生たちは教員免許状という権威づけを持たない、真正性をもたないものたちなのだから。ラカンに同じ質問を投げたでしょう。おそらくラカンは、「問題ない」と応えるはずだ。それというのもラカンは教育について、以下のように暴露しているからだ。

教えるというのはじつに疑わしいことで、わたくしが今この小さな教卓のこちら側に占めている、この場所に連れてこられるや否や、教えるに際して十分でなかったという事例はありません。すくなくとも見掛け上は、ですけれど。[中略] 無知ゆえに不適格である教授をみたひとなどいません。ひとは知っている者の立場にさらされている間は、いつだって十分に知っているのです。誰かが教える者としての立場に立つ限り、そのひとが役に立たないなどということは決してありません。[32]

《知っている」と想定された主体》の、転移のメカニズムを確認してきたわたくしたちにとって、以上のラカンのことはさほど難解には映らないだろう。そう、教えるものはべつに、「知らなくてもよい」のだ。だからこそ教師は、学生でもよい。無知であってさえ、よい。そうではなくて、何かを知っていると想定されることこそが大事なのだ。そうすればいつだって、十分に知っているのだから。さらにラカンは、別の場所でこのように述べてさえいる。

自分自身の問いに答えを出すのは弟子自身の仕事です。師は「説教壇の上から」出来合いの学問を教えるものではありません。師は、弟子が答えを見出すまさに

その時に答えを与えます。[33]

ひとたび師と認めたらば、師の言動はすべて、弟子にとってのヒントとなる。いったん《知っている」と想定された主体》が成立してしまえば、あとはなんとでもなってしまう。たとえ師がほんとうは無知であったとしても、たとえ間違った答えを用意していたとしても。その場合においてさえ、弟子は「勝手に」何かを学ぶこととなる。弟子にとっての師は、いつだって十分に知っているのだから。ラカンによれば、「学ぶ」というメカニズムは、以上のようなものである。

どこにいても誰といても、しょせん人間はひとり。学ぶ際にもこのことに例外はない。しかしながら、ひとはひとりでは生きていけない[34]。わたくしたちは、ひとりで学ぶことの限界を知っている。わたくしたちはひとりで学びながらも、誰かにその認証を得ることを欲望する。そのためにこそわたくしたちは、誰かを《知っている」と想定された主体》として、その誰かを師と認め、答えを受け取る／権威づけてもらう。こうして「学び」が成立する。だからこそ、師は「無知」であることすら、許される。それゆえに『学び合い』は、教師を分析家として、分析主体／患者としての学生たちが教師の欲望を引き受けることによって、成立する。そして転移を引き受けた学生がまた、他の学生にとっての分析家となり、転移がいわば「伝染」することによって、成立するものである[35]。したがって要求される条件は、少なくとも彼なり彼女なりに、《知っている」と想定された主体》が想定される、この条件となるだろう。かくて学生は、そして教師は、《知っている」と想定された主体》の夢を見る。

7. おわりに

本論文では、二重括弧の『学び合い』において生じるメカニズムが、《知っている」と想定された主体》の成立、ひいては転移の成立にあることを、アーリ／ラーソンの観光理論と、ラカンの思想とから確認した。おわりにかえて、もうひとつ重要な視座を供給したい。

『学び合い』においては、グループを指示することもない。したがって学生たちはまず、「いつものグループ」をつくり、そこで学びを共有することとなる。その際教師には、誰と誰とが仲が良いか、そしてあまりクラスとの結びつきが強くない学生は誰か、といった現実がまざまざと見せつけられる²。しかしながら『学び合い』が進むと、ある

² こうした事情は、通常の講義形式、授業形式においてはなかなか気づかれないことである。むしろ目を背けたくなる事実である。精神分析的に言うならば、これは「認めた

グループから勇気ある学生が、別のグループへと旅立つ瞬間を見て取ることができる。そのときその勇気ある学生は、ゲオルグ・ジンメル(Georg Simmel, 1858-1918)の『社会学 *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung Gesamtausgabe*』(1908)所収、「よそ者についての補論 Exkurs über den Fremden」において考察される、「よそ者 Fremde」[36]として機能する。

ジンメルは「よそ者」を、典型的には行商人(そしてユダヤ人)として提示する。この「よそ者」は、ある社会集団に他の何かを送り込む機能を果たすのだが、これは学生たちのグループ同士の交流をもたらすものとして捉えることができる。なぜそんなことが可能なのか。ジンメルは「橋と扉 *Brüche und Tür*」(1909)において、以下のよう

人間は、事物を結合する存在であり、同時にまた、つねに分離しないではいられない存在であり、かつまた、分離することなしには結合することのできない存在だ。[中略] /そして、同じように人間は境界をもたない境界的存在だ。[37]

それゆえに学生たちはグループをなし、ひとつのグループとして結合するとともに他のグループとは分離する。しかし境界をもたない境界的存在としてわたくしたちはしばしば、行商人のようにそのグループを超え出て、他のグループへと結びつく。そしてその際、新たな場所において《知っていると思定された主体》として受肉し/させ、転移を伝染させるだろう。かくてふたたび、さらに繰り返し、《知っていると思定された主体》の夢を見る。

参考資料

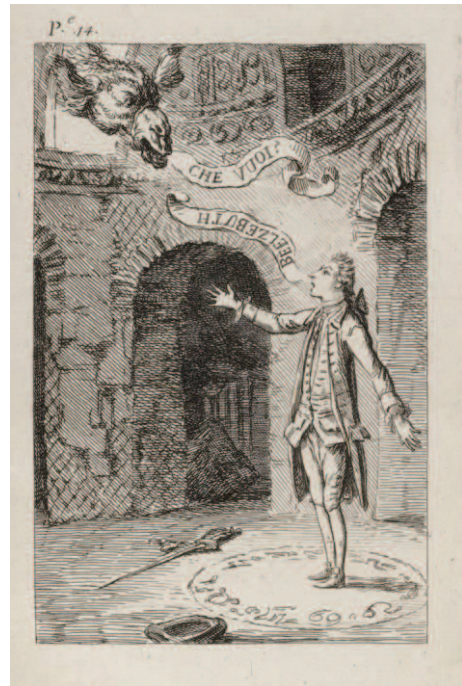


図1 『恋する悪魔』挿絵。Jacques Cazotte, *Le diable amoureux, Nouvelle espagnole*, A Naples, 1772.



図2 『鏡像段階「これがお前だよ」 *Le stade du miroir: « tu es cela »*』 Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes dans Œuvres complètes Tome IV*, Seuil, 2002. p.601.

くないもの」、つまり否認したいモノゴトとなるだろう。わたくしたちは通常、都合の悪い事実を覆い/ヴェールをかけている。

文献一覧

- Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes dans Œuvres complètes Tome IV*, Seuil, 2002.
- Daniel J. Boorstin, *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America, 50th Anniversary Edition with a New Afterword by Douglas Rushkoff*, Vintage Books, 2012. (Originally published: Daniel J. Boorstin, *The Image: or, What Happened to the American Dream*, Atheneum, 1962, Weidenfeld & Nicolson, 1962, Pelican Edition, 1963.)
- ダニエル・J. ブーアスティン (星野郁美、後藤和彦訳) 『幻影の時代 マスコミが製造する事実』、東京創元社、1964年。
- Jacques Cazotte, *Le diable amoureux, Nouvelle espagnole*, A Naples, 1772.
- ジャック・カゾット (渡辺一夫、平岡昇訳) 『悪魔の恋』、国書刊行会、1990年。
- 江村直人・新名主敏史 (西川純シリーズ監修) 『すぐ実践できる! アクティブ・ラーニング高校英語』、学陽書房、2017年。
- Michel Foucault, *The Birth of the Clinic*, Translated from the French by A. M. Sheridan, Tavistock, 1976.
- 原一樹「D. マキアーネル著『観光倫理』に関する批判的分析 ツーリストサイトと観光者の考察からドゥルーズ＝ガタリ哲学へ」『研究論叢』90号、pp.1-20、2018年。
- ヒッチコック／トリュフォー (山田宏一、蓮實重彦訳) 『定本 映画術』、晶文社、1990年。
- 飯野和夫「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」『名古屋大学人文学研究論集』第1号、99-128頁、2018年。
- 井筒俊彦「意識と本質 東洋哲学の共時的構造化のために」『意識と本質 精神的東洋を求めて』所収、岩波文庫、1991年。(単行本は、岩波書店、1983年。)
- 井筒俊彦「文化と言語アラヤ識 異文化間対話の可能性をめぐって」『意味の深みへ 東洋哲学の水位』所収、岩波文庫、2019年。(単行本は、岩波書店、1985年。)
- 井筒俊彦『東洋哲学覚書 意識の形而上学 『大乘起信論』の哲学』、中公文庫、2001年。
- 上倉庸敬「映像によるドラマ 劇映画について」『F B』2、pp.12-17、1994年4月号。
- 上倉庸敬「バラ、そしてジャスミン」『象徴主義の光と影』所収、宇佐美斎編著、ミネルヴァ書房、1997年。
- Jacques Lacan, *Écrits*, Seuil, 1966.
- ジャック・ラカン (宮本忠雄、竹内迪也、高橋徹、佐々木孝次共訳) 『エクリ I』、弘文堂、1972年。
- ジャック・ラカン (佐々木孝次、三好暁光、早水洋太郎共訳) 『エクリ II』、弘文堂、1977年。
- ジャック・ラカン (佐々木孝次、海老原英彦、芦原誉共訳) 『エクリ III』、弘文堂、1981年。
- Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre I : Les écrits techniques de Freud 1953-1954, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Seuil, 1981.
- ジャック・ラカン (小出浩之、小川豊昭、小川周二、笠原嘉共訳) 『フロイトの技法論 (上)』、岩波書店、1991年。
- ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、小川周二共訳) 『フロイトの技法論 (下)』、岩波書店、1991年。
- Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre II : Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse 1954-1955, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Seuil, 1978.
- ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳) 『自我 (上)』、岩波書店、1998年。
- ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳) 『自我 (下)』、岩波書店、1998年。
- Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre III : Les psychoses 1955-1956, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Seuil, 1981.
- ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉共訳) 『精神病 (上)』、岩波書店、1987年。
- ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉共訳) 『精神病 (下)』、岩波書店、1987年。
- Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XI : Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Seuil, 1973.
- ジャック・ラカン (小出浩之、新宮一成、鈴木國文、小川豊昭共訳) 『精神分析の四基本概念』、岩波書店、2000年。
- Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XX : Encore, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Seuil, 1975.
- ジャック・ラカン (藤田博史、片山文保訳) 『アンコール』、講談社選書メチエ、2019年。
- Dean MacCannell, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, with a New Introduction*, University of California Press, 2013. (Originally published: Dean MacCannell, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, University of California Press, 1999.)
- ディーン・マキアーネル (安村克己ほか訳) 『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』、学文社、2012年。
- Dean MacCannell, *The Ethics of Sightseeing*, University of California Press, 2011.

中村忠司、王静編『新・観光学入門』、晃洋書房、2019年。

西川純『クラスがうまくいく！ 『学び合い』ステップアップ』、学陽書房、2012年。

西川純『『学び合い』を成功させる教師の言葉かけ』、東洋館出版社、2015年。

西川純『THE 教師力ハンドブックシリーズ 簡単に確実に伸びる学力向上テクニック入門〈会話形式でわかる『学び合い』テクニック〉』、明治図書出版、2015年。

西川純『週イチでできる！ アクティブ・ラーニングの始め方』、東洋館出版社、2016年。

西川純『THE 教師力ハンドブックシリーズ みんなで取り組む『学び合い』入門 スムースな導入ステップ』、明治図書出版、2017年。

西川純『私は『学び合い』をこれで失敗し、これで乗り越えました。』、東洋館出版社、2017年。

小田昇平「コンディヤック『人間認識起源論』における分析的方法 想像が支える真実らしさの論理」『美学』第66巻第1号、41-52頁、2015年。

小田昇平「「女は存在しない」のか セルジュ・ゲンスブール監督作品『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』についての試論」『沼津工業高等専門学校研究報告』第53号、93-100頁、2019年。

小田昇平「非在から不在へ、「観光のまなざし」と「ラカンのまなざし」との同一化 『ラブライブ！ サンシャイン！！』の事例から」『文明と哲学』第11号、188-202頁、2019年。

斎藤環『生き延びるためのラカン』、ちくま文庫、2012年。（単行本は、バジリコ、2006年。）

Georg Simmel, „Florenz“. In: *Gesamtausgabe* (Bd. 8). 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1993.

ゲオルグ・ジンメル（斎藤栄治訳）「フィレンツェ」『芸術哲学』所収、岩波文庫、1955年。

Georg Simmel, „Venedig“. In: *Gesamtausgabe* (Bd. 8). 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1993.

ゲオルグ・ジンメル（斎藤栄治訳）「ヴェネツィア」『芸術哲学』所収、岩波文庫、1955年。

ゲオルグ・ジンメル（北川東子編訳、鈴木直訳）「ヴェネツィア」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、1999年。

Georg Simmel, „Exkurs über den Fremden“. In: *Gesamtausgabe* (Bd. 11). 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1992.

ゲオルグ・ジンメル（北川東子編訳、鈴木直訳）「よそ者についての補論」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、1999年。

Georg Simmel, „Brüche und Tür“. In: *Gesamtausgabe* (Bd. 12). 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2001.

ゲオルグ・ジンメル（北川東子編訳、鈴木直訳）「橋と扉」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、1999年。

Georg Simmel, „Über die Karikatur“. In: *Zur Philosophie der Kunst : philosophische und kunstphilosophische Aufsätze*, Gustav Kiepenheuer Verlag, Potsdam, 1922.

ゲオルグ・ジンメル（斎藤栄治訳）「戯画について」『芸術哲学』所収、岩波文庫、1955年。

内田樹『映画の構造分析 ハリウッド映画で学べる現代思想』、文春文庫、2011年。（単行本は、晶文社、2003年。）

内田樹『他者と死者 ラカンによるレヴィナス』、文春文庫、2011年。（単行本は、海鳥社、2004年。）

内田樹『先生はえらい』、ちくまプリマー新書、2005年。

内田樹『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』、講談社文庫、2009年。（単行本は、講談社、2007年。）

John Urry and Jonas Larsen, *The Tourist Gaze 3.0*, Sage Publications, 2011.

ジョン・アーリ／ヨナス・ラーソン（加太宏邦訳）『観光のまなざし [増補改訂版]』、法政大学出版局、2014年。

財津理「ジャック・ラカン『盗まれた手紙』についてのセミナー」の翻訳と注釈(1)『経済志林』第78巻第4号、341-363頁、2011年。

引用文献

- [1] ホームページは、<http://www.iamjun.com/>。このホームページには、『学び合い』についての豊富な情報と資料とがある。西川は、『学び合い』を実践するのであれば、以下の少なくとも三冊を読むことを推奨している。西川純『週イチでできる！ アクティブ・ラーニングの始め方』、東洋館出版社、(2016年)。西川純『『学び合い』を成功させる教師の言葉かけ』、東洋館出版社、(2015年)。西川純『クラスがうまくいく！ 『学び合い』ステップアップ』、学陽書房、(2012年)。
- [2] 江村直人・新名主敏史（西川純シリーズ監修）『すぐ実践できる！ アクティブ・ラーニング高校英語』、28頁、学陽書房、(2017年)。
- [3] John Urry and Jonas Larsen, *The Tourist Gaze 3.0*, Sage Publications, (2011).、ジョン・アーリ／ヨナス・ラーソン（加太宏邦訳）『観光のまなざし [増補改訂版]』、法政大学出版局、(2014年)。社会学者ジョン・アーリによる『観光のまなざし』初版は1990年に出版、時代の変

化に応じて 2002 年に第二版が出版された。共著者として地理学者ヨーナス・ラーソンを迎え改訂された第三版が、この 2011 年に出版された『*The Tourist Gaze 3.0 観光のまなざし* [増補改訂版]』である。以下、本論文においては、『観光のまなざし』という書名において、この第三版を指すこととする。また、英語、フランス語、ドイツ語の翻訳はすべて論者によるが、既存の翻訳がある場合には、参照させていただいた。記して御礼を申し上げたい。以降、外国語文献については、原著のページ数を p.xx.あるいは S. xx. と表記する。日本語訳を参照した場合には、p.xx.、xx 頁あるいは S. xx.、xx 頁と併記する。

[4] 拙論「非在から不在へ、「観光のまなざし」と「ラカンのまなざし」との同一化 『ラブライブ！ サンシャイン！！』の事例から』『文明と哲学』第 11 号、(2019 年)、188-202 頁。を参照。当該論文においては、美学の視座から観光体験という現象を捉えるため、アーリ／ラーソンの『観光のまなざし』とラカンの思想とを礎とし、沼津における実際の事例として『ラブライブ！ サンシャイン！！』を取り上げて検討した。この論文においても、「観光のまなざし」とラカンによる精神分析理論との親和性を用いている。

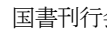
[5] 「まなざし」という概念については、拙論「非在から不在へ、「観光のまなざし」と「ラカンのまなざし」との同一化」の註 3 を参照。フーコーの「まなざし」はフランス語の regard であるが、アーリは『臨床医学の誕生』の英訳版から gaze を採用している。Michel Foucault, *The Birth of the Clinic*, Translated from the French by A. M. Sheridan, Tavistock, (1976). の Translator's Note を参照。また、飯野和夫によれば、フーコーによる「まなざし」概念は、18 世紀フランスの思想家、エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック(Étienne Bonnot de Condillac, 1714-80)の生前最後の著作、『論理学 *La logique*』(1780)に由来する。飯野和夫「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」『名古屋大学人文学研究論集』第 1 号、(2018 年)、99-128 頁。を参照。

[6] John Urry and Jonas Larsen, *The Tourist Gaze 3.0*, p.1.、2 頁。

[7] *Ibid.*, p.1.、2 頁。強調は原著。この少し後にアーリ／ラーソンは、観光に対して定義を与える。その定義 6 において、anticipation の力について言及している。*Ibid.*, p.6.、7 頁。

[8] 糸井重里による、西武百貨店のコピー。斎藤環『生き延びるためのラカン』、27 頁、ちくま文庫、(2012 年)。(単行本は、バジリコ、2006 年)。

[9] このことば自体は、ジャック・カゾット(Jacques

Cazotte, 1719-92)による、『恋する悪魔 *Le diable amoureux*』(1772)に登場するせりふ。Jacques Cazotte, *Le diable amoureux, Nouvelle espagnole*, A Naples, (1772).、ジャック・カゾット(渡辺一夫、平岡昇訳)『悪魔の恋』、国書刊行会、(1990 年)。 [図 1] を参照。ラカンによる言及は、Jacques Lacan, *Écrits*, p.815. Seuil, (1966).、ジャック・ラカン(佐々木孝次、海老原英彦、芦原春共訳)『エクリ III』、326 頁、弘文堂、(1981 年)。およびその訳註 427 頁。を参照。

[10] 『観光のまなざし』第三版が出版された同じ年に、観光学と精神分析とを重ね合わせて考察する論考、Dean MacCannell, *The Ethics of Sightseeing*, University of California Press, (2011). が出版されている。このことをわたくしは、京都外国語大学の原一樹教授による、以下の論文より知ることとなった。原の思索は、哲学と観光社会学との結節点をさぐるもので、わたくしにとって有益な視座を提供してくれる。記して御礼を申し上げたい。原一樹「D. マキアーネル著『観光倫理』に関する批判的分析 ツーリストサイトと観光者の考察からドゥルーズ＝ガタリ哲学へ」『研究論叢』90 号、(2018 年)、pp.1-20。

[11] コンディヤックは 18 世紀においてすでに、存在しないものを支柱として議論を展開している。拙論「コンディヤック『人間認識起源論』における分析的方法 想像が支える真実らしさの論理」『美学』第 66 巻第 1 号、(2015 年)、41-52 頁。を参照。こうした議論は精神分析の、そしてラカンの得意とするところである。拙論「非在から不在へ、「観光のまなざし」と「ラカンのまなざし」との同一化」を参照。なお、ラカンは後述するセミナー第 2 巻において、コンディヤック『感覚論 *Traité des sensations*』(1754)を読むように、と勧めている。Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre II : Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse 1954-1955, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, pp.89-90. Seuil, (1978).、ジャック・ラカン(小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳)『自我(上)』、99 頁、岩波書店、(1998 年)。

[12] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XI : Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Postface, p.309. Seuil, (1973).、ジャック・ラカン(小出浩之、新宮一成、鈴木國文、小川豊昭共訳)『精神分析の四基本概念』、後記、375 頁、岩波書店、(2000 年)。

[13] Jacques Lacan, *Écrits*, p.11. Seuil, (1966).、ジャック・ラカン(宮本忠雄、竹内迪也、高橋徹、佐々木孝次共訳)『エクリ I』、7 頁、弘文堂、(1972 年)。強調は原著。

[14] 財津理「ジャック・ラカン『盗まれた手紙』につい

てのセミナー」の翻訳と注釈(1)『経済志林』第 78 巻第 4 号、(2011 年)、341-363 頁。を参照。より正確には、この論文にはエピグラフとして出典の明記なく引用されたゲーテ『ファウスト』の一節、Und wenn es uns glückt, / Und wenn es sich schickt, / So sind es Gedanken. が存する。実際のところ、このエピグラフもまた難解であり、そのうえラカンがこれから進める思索を予感させる重要なものであるが、本論ではここには立ち入らない。同論文、342-348 頁。を参照。

[15] Jacques Lacan, *Écrits*, p.11.、『エクリ I』、7 頁。

[16] 内田樹『映画の構造分析 ハリウッド映画で学べる現代思想』、文春文庫、(2011 年)。(単行本は、晶文社、2003 年。)内田樹『他者と死者 ラカンによるレヴィナス』、文春文庫、(2011 年)。(単行本は、海鳥社、2004 年。)内田樹『先生はえらい』、ちくまプリマー新書、(2005 年)。内田樹『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』、講談社文庫、(2009 年)。(単行本は、講談社、2007 年。)など。本論文は、内田樹氏の著作に多くの示唆を得ている。記して御礼を申し上げたい。

[17] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre III : Les psychoses 1955-1956, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, p.260. Seuil, (1981).、ジャック・ラカン(小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉共訳)『精神病(下)』、9 頁、岩波書店、(1987 年)。

[18] クレシヨフ効果はその一例である。拙論「「女は存在しない」のか セルジュ・ゲンスブール監督作品『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』についての試論」、『沼津工業高等専門学校研究報告』第 53 号、(2019 年)、93-100 頁。の註 10、註 11、内田樹『映画の構造分析』、第一章、ヒッチコック／トリュフォー(山田宏一、蓮實重彦訳)『定本 映画術』、218 頁、晶文社、(1990 年)。およびその註 4、239 頁を参照。また、上倉庸敬は映画について論じる際、アリストテレス風にドラマとしての「シーン」の概念を提示する。「シーン」は「はじめ」「なか」「おわり」を持ち、その「なか」の位置には「意味」がおかれる。これもまた、解釈だ。上倉庸敬「映像によるドラマ 劇映画について」『F B』、2、(1994 年 4 月号)、pp.12-17、14 頁。上倉庸敬「バラ、そしてジャスミン」『象徴主義の光と影』所収、宇佐美斉編著、ミネルヴァ書房、69 頁、(1997 年)、註 11 も参照。および拙論「「女は存在しない」のか」の 1、方法論、あるいは準備として、を参照。

[19] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XX : Encore, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, p.174. Seuil, (1975).、ジャック・ラカン(藤田博史、片山文保訳)『アンコール』、247 頁、講談社選書メチエ、(2019 年)。

[20] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XI*, p.258.、313 頁。

[21] *Ibid.*, p.257.、313 頁。

[22] *Ibid.*, p.258.、313 頁。

[23] *Ibid.*, p.259.、315 頁。括弧内は引用者による補足。

[24] *Ibid.*, p.259.、315 頁。

[25] *Ibid.*, p.300.、364 頁。

[26] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XX*, p.182.、260 頁。

[27] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XI*, p.261.、318 頁。

[28] 斎藤環『生き延びるためのラカン』、27 頁。

[29] Daniel J. Boorstin, *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America, 50th Anniversary Edition with a New Afterword by Douglas Rushkoff*, Vintage Books, (2012). (Originally published: Daniel J. Boorstin, *The Image: or, What Happened to the American Dream*, Atheneum, 1962, Weidenfeld & Nicolson, 1962, Pelican Edition, 1963.)、ダニエル・J. ブーアスティン(星野郁美、後藤和彦訳)『幻影の時代 マスコミが製造する事実』、東京創元社、(1964 年)。の「擬似イベント pseudo-events」や、Dean MacCannell, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, with a New Introduction*, University of California Press, (2013). (Originally published: Dean MacCannell, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, University of California Press, 1999.)、ディーン・マキアーネル(安村克己ほか訳)『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』、学文社、(2012 年)。の議論も、焦点はこの真正性や権威づけに存する。中村忠司、王静編『新・観光学入門』、110-111 頁、晃洋書房、(2019 年)。を参照。アーリ／ラースンも、真正性ないしは権威づけについて、早々に触れている。John Urry and Jonas Larsen, *The Tourist Gaze 3.0*, p.2.、4 頁を参照。ラカンもまた、『精神分析の四つの基本概念』において、破門とともに autoriser を問題としている。Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XI*, pp.9-15.、1-8 頁。

[30] ラカンによる言語獲得の理論と、その背景となる鏡像段階については、拙論「非在から不在へ、「観光のまなざし」と「ラカンのまなざし」との同一化」を参照。また、『ロラン・バルトによるロラン・バルト』における写真、『鏡像段階「これがお前だよ」 *Le stade du miroir: « tu es cela »*」[図 2]を参照。Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes dans Œuvres complètes Tome IV*, p.601. Seuil, (2002).

[31] John Urry and Jonas Larsen, *The Tourist Gaze 3.0*,

p.3、5-6 頁。アーリ／ラースンはこうした対照項への気配りを忘れていない。マキヤーネルももちろん、同様の議論の線上にいる。曰く、「観光は定義上、実社会のシリアスで重大な制約からの合間や休憩のあいだに生じるものである。」Dean MacCannell, *The Ethics of Sightseeing*, p.46.

[32] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre II*, p.282.、ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳) 『自我 (下)』、岩波書店、1998 年、56 頁。

[33] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre I : Les écrits techniques de Freud 1953-1954, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, p.9. Seuil, (1981).、ジャック・ラカン (小出浩之、小川豊昭、小川周二、笠原嘉共訳) 『フロイトの技法論 (上)』、3 頁、岩波書店、(1991 年)。強調は原著。

[34] こうした事情は、後にふれるゲオルグ・ジンメルによる、分離と結合との議論と重複するだろう。Georg Simmel, „Brüche und Tür“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 12)*. 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, (2001).、ゲオルグ・ジンメル (北川東子編訳、鈴木直訳) 「橋と扉」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、(1999 年)。を参照。

[35] 位相の異なる、しかしアナログな説明を付すならば、井筒俊彦(1914-93)が提示する「薰習 *vāsanā*」があげられる。AからBへの影響関係を考えるとき、いわゆる因果関係においてはただ、AがBをなんらか変質させるにすぎない。「薰習」においては、AからBへの影響が生じ、Bがなんらか変質するとともに、A自体もまた変質を伴う。文脈が異なるふたつのメカニズムの類似性を指摘するのは、この関係性を強調するためにほかならない。井筒俊彦「文化と言語アラヤ識 異文化間対話の可能性をめぐって」『意味の深みへ 東洋哲学の水位』所収、92-93 頁、岩波文庫、(2019 年)。(単行本は、岩波書店、1985 年)。
および井筒俊彦『東洋哲学覚書 意識の形而上学 『大乘起信論』の哲学』、143-159 頁、中公文庫、(2001 年)。を参照。井筒俊彦「意識と本質 東洋哲学の共時的構造化のために」『意識と本質 精神的東洋を求めて』所収、50 頁、岩波文庫、(1991 年)。(単行本は、岩波書店、1983 年)。
にも「薰習」への言及がある。

[36] Georg Simmel, „Exkurs über den Fremden“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 11)*. 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, (1992).、ゲオルグ・ジンメル (北川東子編訳、鈴木直訳) 「よそ者についての補論」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、(1999 年)。
ジンメルの「よそ者」についての思索や、「橋と扉」、「フ

ィレンツェ Florenz」(1906)、「ヴェネツィア Venedig」(1907)といった論考は、観光学の対象としてもまた有益な視座を供給してくれる。Georg Simmel, „Florenz“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 8)*. 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, (1993).、ゲオルグ・ジンメル (斎藤栄治訳) 「フィレンツェ」『芸術哲学』所収、岩波文庫、(1955 年)。
Georg Simmel, „Venedig“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 8)*. 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, (1993).、ゲオルグ・ジンメル (斎藤栄治訳) 「ヴェネツィア」『芸術哲学』所収、岩波文庫、(1955 年)。
ゲオルグ・ジンメル (北川東子編訳、鈴木直訳) 「ヴェネツィア」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、(1999 年)。

[37] Georg Simmel, „Brüche und Tür“. S. 60-61.、100 頁。
同様に、ジンメルは「カリカチュアについて Über die Karikatur」(1917)において、「人間は生まれながらに境界を越えて歩むものである」と述べている。Georg Simmel, „Über die Karikatur“. In: *Zur Philosophie der Kunst : philosophische und kunstphilosophische Aufsätze*, S. 87. Gustav Kiepenheuer Verlag, Potsdam, (1922).、ゲオルグ・ジンメル (斎藤栄治訳) 「戯画について」『芸術哲学』所収、107 頁、岩波文庫、(1955 年)。